董其昌書論における生熟説について

尾川明穂

はじめに

董其昌（明・嘉靖三四―崇禎九、一五五五―一六三六）の書論は、『容台別集』（一六三〇初刻）、『画禅室随筆』（一六七八初刻か）[1]により容易に閲しうることもあり、明末書論の中でも特に注目されている。しかし、彼の主張・好尚が変遷した可能性は考慮されない傾向にあり[2]、稿者はこれまで彼の題跋・款記など有紀年記述の収集を通じて、概ね以下のような変遷があったと推測した[3]。

①三五歳～四〇代前半
　擬古の標榜、初唐書人・米芾称賛
②四〇代前半～五二歳頃
　古法を変じて書することの推奨
　初唐書人・米芾称賛、楊凝式称賛（一件のみ、後掲）
③五二歳頃～五七歳頃
　古法を変じて書することの推奨
　初唐書人・顔真卿称賛、宋人貶斥
④五八歳前後
　書の時代性説の提唱、初唐唐人・顔真卿称賛
　宋人貶斥
⑤五九歳頃以降
　離合説の提唱、初唐書人・宋人貶斥、楊凝式称賛

特に③⑤においては、董の主張・好尚が変遷した要因と思しき事象も見られ、顔真卿帖所載『鼎帖』の収蔵（五一～五八歳時）[4]、及び王肯堂による『鬱岡斎墨妙』刊行（楊凝式帖未収。一六一一、董五七歳三月時の刻成）[5]などといった当時の鑑蔵行為が強く影響したものと推測される。

董其昌の書論においては上記のほか、「生」・「熟」二語や、「熟」語のみを用いた説（以下、双方を便宜的に「生熟説」

と称する）も、その代表的なものと目されている。董在世時より顧凝遠『画引』にて援用され[6]、また、倪濤『六芸之一録』（清初刊）巻二八〇・巻三七二、康熙帝勅撰『佩文斎書画譜』（一七〇五刊）巻四四に採録されて以降、注目されていったと推測される。現代では多くの研究が備わり[7]、概ね、「生」字によって書者の人格・精神の自然な流露を謳い、それに伴う新たなスタイルの獲得を訴えるものと捉えられている。また、技巧の習熟を指す「熟」を経て、「生」の境地に至るという過程を想定する向きも多い[8]。

しかし、董の生熟説は、後述のように用例が五件と少ない上、彼が提唱した書の時代性説[9]と同じく、湯煥の書論に影響されて草卒に説かれた可能性も否定できない。書の時代性説・離合説などを含めた董の書論全体において、いかなる位置を占めるかを中心に検討し、また生熟説で語られた内容の変化の有無についても見る必要があろう。

本稿では、まず、董其昌が五七歳時に生熟説・書の時代性説を同時に述べたことに注目し、両者を総合して主張の整理を試みたい。その上で、前述した「熟」から「生」へという段階説と、これに該当しない生熟説との主張の差を確かめたい。また、彼が六〇歳以降にしばしば用いた離合説との接続についても検討する。

なお、本来ならば実作例と照らしつつ各評語の解釈にも及ぶべきであるが、本稿では「生」・「熟」二語の意味合いの変化を中心に考察したい。生熟説が、新たな理論が生じる前の過渡期に説かれたもので、主張が一貫していないことを導きたい。

一．『味水軒日記』所収款記の生熟説

董其昌の知己・李日華（一五六五―一六三五）には『味水軒日記』があり、その巻四（万暦四〇、一六一二）三月二六日項に、董五七歳八月時の臨書款記が収録されている（以下、「味水款記」と称する）。ここに記される生熟説は、彼の用例全五件中、唯一紀年を有するもので、他条に記されている書の時代性説との関連も想定される。

時代性説検討の目的から、別稿[10]で味水款記を論じた際、湯煥（一五五五または一五七〇挙人）『書指』巻上第七・八則に近似する記述が確認できた。また、当該款記の内容が執筆前後の董の主張と大きく異なることもあり、本款記は『書指』からの影響を受けて述べたものと推測した。

『書指』より窺えることとして、①「熟」の後に「生」となるべきとする点、②王羲之の人品の高さを称賛し、その書が「法」を有していると認める点、③「作意」が甚だ

しいと古人の書が持つ味わいが失われるとする点などが挙げられる。[11] これと照らしつつ、味水款記の生熟説について検討したい。紙幅の都合上、本稿の検討に必要な第二・五～七則のみを示し、第七則の現代語訳を挙げたい。以下、括弧内は稿者による。

〔第二則〕褚河南（遂良）書如瑶台嬋娟、不勝綺靡。乃其人以大節著、所謂宋広平（璟）鉄心石腸、而賦情独治艶者。顔魯公（真卿）碑、書如其人、所謂骨気剛勁如端人正士、凛不可犯也。然世所重、惟其行書、如「争坐位」・「祭蔡明遠」・「劉太冲」・「馬病」・「鹿脯」・「乞米」諸帖、最為烜赫有名、直接二王（王羲之・王献之）、出唐人之上。蓋以気格勝、磊磊砢砢、不受縄束、最是端人正士本色。痴人前不得説夢。説著如端人正士、便作算子書。安能使木仏放光照諸天世界耶。

〔第五則〕晋人書取韻、唐人書取法、宋人書取意。或曰、「意不勝于法乎」。不然。宋人自以其意為書耳、非能肖古人之意也。然趙子昂（孟頫）則矯宋之弊、雖己意亦不用矣。此必宋人所訶、蓋為法所縛也。

〔第六則〕邢子愿（侗）侍御嘗与予言、「右軍（王羲之）之後、即以趙文敏（孟頫）為法嫡、唐宋人皆旁出耳」。此非篤論。文敏之書、病有無勢。所学右軍、猶在形骸之外。右軍雄秀之気、文敏無得焉、何能接武山陰（王羲之）也。雖然其可伝者、在自為一家、望而可知為趙法。非此、則鮮于（枢）・康里（巎巎）得幷駆於墨苑矣。

〔第七則〕余十七歳学書、二十二歳学画、今五十七年矣。有謬称許者、余自校勘、頗不似米顚作欺人語。大都画与文太史校、各有長短。行間茂密、千字一同、吾不如趙。若臨彷歴代、趙得其十一、吾得其十七。又趙書因熟得俗態、吾書因生得秀色。趙書無不作意、吾書往往率意。当吾作意、趙書亦輸一籌、第作意者少耳。古人云、「右軍臨池学書、池水尽黒、仮令耽之若是、故為勝」。余於趙亦然。米老云、「吾書無一点右軍俗気、吾画無一点李成俗気」。然世終莫之許也。政恐余所自評、猶数憐児不覚醜耳。辛亥中秋、董其昌。[12]

〔上略〕書では、行間にも溢れるものがあり千字が同じようである点では、私は趙孟頫に勝っていない。もし、歴代書跡を臨書・彷書すれば、趙は歴代書跡の一割を得、私は七割を得る。また、趙孟頫の書は「熟」によって俗態を得ており、私の書は「生」によって秀色を得ている。趙書は作意でないところがなく、私の書はしばしば率意である。私の作意は趙書にまた劣るけれども、私の書はただ作意しているところが少ない

だけである。古人は言った。「王羲之が池に臨んで書を学び、池の水はみな黒くなった。もしもそれほどに学書に耽ったならば私の方が勝るだろう」（『晋書』王羲之伝の改変か）と。私は趙に対してもまたそうである。米芾は言った。「私の書には、一点も王羲之の俗気はない。私の画には、一点も李成の俗気はない」と。しかし、世間はついにこの言を許さなかった。私が自身を評したことが、しばしば自分の子どもを哀れんでその醜さを感じないようであるのを恐れる（下略）」

第七則に生熟説が記されており、また、書の時代性説も第五則に見られる。いずれも「意」・「作意」を用いる趙孟頫書を貶斥し、他の時代の書人や自身を評価するものである。その間の第六則においては、趙書が一幟を立てているとしながらも、「勢」[13]のないことを指摘していることから、結構を整えたり、「千字が全て同じである」かのようにしてしまう意図の現れを貶斥しているものと考えられる。

本款記の内容を前稿[14]の検討に従い整理すると左のようになり、第五則の書の時代性説を中心に整理できる。

①晋人　個性に基づき発揮される（？）「韻」（気韻）。自然に表出するもので称賛される

②唐人　個性によらない「法」（普遍的法則。人品と関連）。自然に表出するもので称賛される

③宋人　個性に基づき発揮される「意」（意図）。意図の強すぎるものとして貶斥される

④趙孟頫　個性によらない「法」への拘泥、自身の「意」の排除。千字が同じであるかのように書けるほどの「熟」。「法」実現の意図が強すぎるものとして貶斥される

「生」語は董本人の書の批評に用いられているため、この整理より外れるが、「率意」語により意図の少なさを説いているため、どちらかといえば「韻」や「法」に近い位置にあるものと見てよかろう。

「熟」は趙孟頫、「生」は董自身というように、この二語は各人の書の性質を説くため、前者から後者へという階梯を認めていない。第三則「蓋以気格勝、磊磊砢砢、不受繩束、最是端人正士本色」も、顔真卿の人品と書風との密接な関連を説いていることから、後天的な学習を経ての「生」の実現は想定していないと考えられる。

なお、かような点は湯煥『書指』とは異なるが、人品と書の関連付けや、意図した執筆の否定が双方に窺えるため、前稿に述べたように湯説が董説の先駆であった可能性は十分考えられる。

董其昌には、ほかに四件の生熟説が確認できる。いずれも無紀年ではあるが、主張が異なり二種に分類できる。以下に、味水款記と同様の説二件と、「熟」から「生」へという階梯を見通す言二件とに分けて示し、その主張の差について検討していきたい。

二、「熟」と「生」の間に断絶を見る説

標記二件について、原文・現代語訳を示しつつ考察を進めたい。特に、①人品など先天的性質への言及、②階梯の想定、③目標とする具体的書法の想定の有無に注目する。

A作書与詩文、同一関捩。大抵伝与不伝、在淡与不淡耳。極才人之致可以無所不能、而淡之玄味必繇天骨、非鑽仰之力・澄練之功所可強入。蕭氏『文選』、正与淡相反者。故曰「六朝之靡」、又曰「八代之衰」。韓・柳以前、此秘未覩。蘇子瞻曰、「筆勢崢嶸、辞采絢爛。漸老漸熟、乃造平淡。実非平淡、絢爛之極」。猶未得十分、謂若可学而能耳。『画史』云、「若其気韻、必在生知」。可為篤論矣。(中略)嘗見妄庸子有摹倣「黄庭経」及僧家学「聖教序」道流学趙呉興者、皆絶肖似転似転遠、何則俗在骨中、推之不去。(中略)欧・虞・褚・薛之書、各有門庭、学之不深、亦得彷彿。惟顔魯公行書、了無定法。此其故殊可参尋、毎挙示人不得解者。(15)

〔作書と詩文は同じ要領である。大抵、後世に伝わるものと伝わらないものとの違いは、「淡」か「淡」でないかにある。才人の趣を極めることは不可能ではないが、「淡」の奥深い味わいは、必ず本人の生まれつきの風格によるものである。外部のものを慕い求めようとする力や、心を澄ませて訓練するという働きによって、無理やりその境地に入れるというものではない。

蕭統『文選』は、まさに「淡」と相反するものである。だから、「六朝の衰え」(陳謨『海桑集』巻六「郭生詩序」か)と言われ、また「八代の衰え」(蘇軾『東坡全集』巻八六「潮州韓文公廟碑」ほか)と言われたのである。韓愈、柳宗元以前には、『文選』は秘匿され見ることができなかった。

蘇軾は言った。「筆勢は積み重ねて高くするようにし、彩り(「辞」は誤りか)はきらびやかにせよ。老いるに従い次第に「熟」となり、そこで「平淡」に至ることになる。しかし、実は「平淡」ではなく、きらびやかさの極致に至るのだ」と。この論はなお十分ではなく、学べばできるというようなことを言っただけだ。

米芾の『画史』に言う。「その気韻のごときは、必ず生まれながらにして知っているものである」と。これは行きとどいた論である。（中略）かつて愚者が「黄庭経」を模倣しているのを見、また「聖教序」を学ぶ僧侶、趙孟頫を学ぶ道士を見た。皆極めて似ているが、似れば似るほど遠ざかってしまっている。なぜかと言えば、俗は生まれつき有しているもので、これを押しのけようとしても取り去れないからである。（中略）欧陽詢、虞世南、褚遂良、薛稷の書は各々宗旨を持っており、これらは深く学ばなくてもまた似せることができる。ただ顔真卿の行書は、遂に定まった法がなくなった。これらは言うまでもなく特に参じて尋ねるのがよい。常に人に挙示しているが、理解する者を得ない〕

なお、蘇軾の語とあるのは、宋・趙令畤『侯鯖録』巻八「東坡与二郎姪書」の以下の記述である。

蘇二処見東坡先生与其書云、「二郎侄、得書知安、并議論可喜、書字亦進、文字亦若無難処。止有一事与汝説、『凡文字、少小時須令気象崢嶸、采色絢爛、漸老漸熟、乃造平淡。其実不是平淡、絢爛之極也』。汝只見爺伯而今平淡、一向只学此様、何不取旧日応挙時文字。看高下抑揚、如竜蛇捉不住。当且学此。只書字亦然。善思吾言」云云。此一帖乃斯文之秘、学者宜深味之。[16]

また、米芾の語とあるのは、実際は宋・郭若虚『図画見聞誌』巻一「論気韻非師」の一部である。

Aは、詩文や書における「淡」の重要性に触れたものである。蘇軾の文論を挙げて「熟」にも言及するが、意図した修練の末に至る「絢爛」の実現には否定的であり、学書の階梯も想定していない。「淡」と「気韻」は、いずれも先天的に備わっている人品が自然に発露したものと考えられる。恐らく「熟」については、外的なものの摂取を非難しているのだろう。なお、初唐書人は似せやすく、顔真卿には定法がないと述べていることから、味水款記と同様、顔書をより高く評価していることが確認できる。

このように理解すると、次のBも学書の階梯を想定していないように思われる。

B吾於書似可直接趙文敏、第少生耳。而子昂之熟、又不如吾有秀潤之気。惟不能多書、以此讓呉興一籌。画則具体而微。要亦三百年来一具眼人也。[17]

〔私は、書では趙孟頫に拮抗できているが、ただ少し「生」である。しかし、趙の「熟」は、また私が優れ

て生き生きとした気を有するのには及ばない。ただ、私は多く書くことができないため、この点において趙に負けている。画においては、趙は体を具えて奥深い。要は三百年来の具眼者である〕

味水款記と同じく、趙に「熟」、自身に「生」を充てる。趙の多書を称賛しているようであるが、恐らくは意図した鍛錬を非難するもので、段階的な展開も想定していない。

以上二件の言がある一方で、湯煥『書指』と同じく「熟」から「生」への展開を説く記述も見られる。次項で確認したい。

三、「熟」から「生」への階梯を想定する説

C余近来臨顔書。因悟所謂折釵股・屋漏痕者、惟二王有之。魯公直入山陰之室、絶去欧・褚軽媚習気。東坡謂、「詩至於子美、書至於魯公」。非虚語也。顔書惟「蔡明遠序」尤為沈古、米海岳一生不能彷彿。蓋亦為学唐初褚公書、稍乏骨気耳。灯下為此、都不対帖、雖不至入俗、第神采璀璨、即是不及古人処。漸老漸熟、乃造平淡。米老猶隔塵、敢自許逼真乎。題以志吾愧。[18]

〔私は近頃、顔真卿の書を臨書している。それで、所謂「折釵股」・「屋漏痕」は、ただ二王だけが有していることを悟った。顔真卿は直接王羲之の室に入り、欧陽詢、褚遂良の繊細で軽やかな優美さや、染みついてしまった風格というものを取り去った。蘇軾が「詩は杜甫において、書は顔真卿において極まった」と言ったのは、空言ではない。顔書では、ただ「蔡明遠序」だけが最も深みのある古びた味わいを有している。

米芾は生涯、顔真卿に似せることはできなかった。私が思うに、米芾は唐初の褚遂良の書を学んだために、やや骨気に乏しくなっただけのことである。灯下で顔書を臨書しているが、全くその帖に向かわない。俗に入るには至らないものの、ただ生き生きと玉のように輝かせる点においては、古人のところに及ばない。老いるほどに熟していき、やがて平淡に至る（前掲蘇軾語の引用か）。米芾は俗塵を隔てたようではあるが、どうして真に逼ったと妄りに自負したのか（下略）〕

顔真卿を二王の書の継承者として称賛する一方、「軽媚」・「習気」を有する初唐書人を貶斥しており、味水款記における唐人全般に対する高い評価とは異なることが窺える。

「熟」語に注目すると、蘇軾語の引用において出現するのみであり、Aで引かれていた「実非平淡、絢爛之極」も

欠落している。このため、「熟」はA・Bと異なり否定されておらず、「熟」を経て「平淡」へという階梯を想定しているものと推測される。筆者の人品などといった先天的な性質には触れられていない。

D画与字各有門庭。字可生、画不可熟。字須熟後生、画須生外熟。[19]

〔絵画と書はそれぞれに流儀がある。書は「生」であるべきで、絵画は「熟」となってはいけない。書は「熟」の後に「生」となるべきで、絵画は「生」を超えた「熟」であるべきである〕

湯煥『書指』と同様、書においては先に「熟」となり、後に「生」となるべきであると説く。しかし、人格などといった先天的性質については触れられておらず、また学書などの際の意図の有無についても言及されていない。

以上のA～D四件について、改めて纏めてみたい。

A・Bは「生」・「熟」の段階的展開を想定せず、筆者の人格など先天的な要素を重視し、意図した学書を非難する。また、味水款記・前掲湯煥説と同様に特定の書との合致も説かず、Aでは顔書の「定法」のなさを謳うほどである。

C・Dにおいては、「熟」→「平淡」・「生」への展開を見ており、筆者の人格については触れられていない。また、褚遂良の書を習った米芾を貶斥するなど、目標とする古法の設定が問題となっていることが窺える。

なお、湯煥『書指』が味水款記の時代性説・生熟説の淵源であろうことはDからも想定できるが、そうであれば、Aの人品を重んじる姿勢と学書の意図性の否定も湯説の影響と見てよかろう。

では、なぜかように主張の異なる生熟説が述べられたのだろうか。董其昌の鑑蔵と、六〇歳頃以降唱えられた離合説との接続からこの問題について考えてみたい。

四．生熟説提唱期間における見解の変化

まずは、先に挙げた生熟説五件がどの期間に説かれたかを検討してみたい。前述のように、味水款記とA・Cでは顔真卿が称賛されているが、前稿[20]において指摘した①顔書を収録する『鼎帖』を董其昌が五一歳から五九歳頃まで所持していた点、②五二～五八歳に顔書に対する積極的な称賛の言が見られる点から、少なくとも上記三件は五八～五九歳頃までに説かれたものと考えられる。

董の離合説に注目してみたい。別稿[21]にて同説を検討した際、①五九歳四月執筆の台北・故宮博物院蔵「論書冊」において、その前哨と見られる先鋭的な説が記されているこ

とを述べ、②五八歳以降、『鬱岡斎墨妙』未収の楊凝式書跡を称賛するために本説が提唱されたと推測した。この「論書冊」には以下のような記述が見られ、擬古の排斥を強く訴えていることが窺える。

那吒拆肉還父、拆骨帰還母。須有父母未生前身、始得楞厳八還之義。所謂「明還日月。暗還晦昧。不汝還者、非汝而誰」。大慧師（宗杲）曰、「猶如籍没尽、更向汝索銭貫。此喩更佳。今有窮子。向大富長者。称貸銭刀。儼然富家翁。若一一償子銭。別有無尽蔵。乃不貧乞。否則依然本相耳」。此語余以論書法。待学得右軍・大令（王献之）・虞・褚・顔・柳（公権）、一一相似。若一一還義（王羲之）・献（王献之）・虞・褚・顔・柳、喩如籍没還債已尽。何処開得一無尽蔵。[22]

技法の習熟などといった点は意識されておらず、複数古人の多様な書風を意識し、それを習得した後の脱却を主張する。その点、段階的展開を説く生熟説C・Dと近似しており、提唱期間が近接している可能性が考えられる。人格などといった先天的な要素への言及も見られず、意図した学書も否定していないため、五七歳時の味水款記、及びA・Bとはその主張が異なっていることがわかる。二年足らずの間に大きく変化したものと見てよかろう。Cでは初唐書人を貶斥しているが、初唐書人に対しては他の記述においても概ね五七歳を境として貶斥に転じているため、これもその時期推定の証左となろう。[23]

以上を踏まえると生熟説は、董が味水款記を執筆した五七歳の前後から、「論書冊」を執筆した五九歳時までの短い期間において説かれたものであり、また、この数年間のうちに重視する要素が変化したと推測される。これを整理すると、以下の通りとなる。

①味水款記（五七歳八月時）、及び生熟説A・B
・目指すべき特定の風格の不設定（古法との距離を問題とせず、また「定法」のないことを称賛）
・先天的な要素である人格を重視。技法の習熟、意図的な学書の否定

②生熟説C・D
・技法の習熟を経て、生き生きと自然に書けるようになるという段階的学書の想定
・目指す古法の良否と、そこからの変化の程度による評価

③離合説の前哨をなす「論書冊」（五九歳四月時）
・多くの古典との合致を経て、その風格を捨て去るという段階的学書の想定

・あらゆる古法からの離脱を要する。

かような変化が生じた背景については、楊凝式書跡を称賛する必要性にあったものと推測される。董其昌は四八歳八月時に楊書を過眼した際、以下のように絶賛しており、楊書の出自であろう王羲之に俗態があるようだと述べている。

唐人書以魯公為清真、猶未極険絶之致。及五代楊少師一出、則如少林拈花。書法自此一変、覚右軍有俗態矣。[24]

これは、当時を回想した他の記述より、于玉立の「月儀帖」唐人臨本所持に影響されて述べたものと推測されるが、[25]既に楊書の風格を強く好んでいたことが窺える。

五一歳時に『鼎帖』顔真卿帖を入手した後は、運筆の勢いのある書風を好み、顔の人品に着目してこれを称賛した。後に王肯堂『鬱岡斎墨妙』が刊行され、また董が『鼎帖』を手放したため、五八歳頃より再び楊書に向かったのだろう。楊の伝では人品の高さを示す記述がなく、[26]また、以前より理想的な書風と見ていたであろうことから、具体的に楊以前の古人を挙げ、それらの書風からの絶妙な合致・離脱を果たしているものとして称賛したものと考えられる。

生熟説が用いられなくなったのは、楊書称賛に不適であるほか、趙孟頫貶斥による利点が自身の書の称揚のみに限られてしまうといった事情もあったのかもしれない。

五．「淡」語による評価―むすびにかえて

前項の最後に見たように、董其昌書論は彼の鑑蔵活動に視点を置いて解釈すべきと見られ、特定の評語の用例を総合して語義を導いたり、他人の用例を援用した解釈に終始すると、正確な彼の書法観が窺えない可能性がある。董のような変動の大きい所説を扱うには、各記述における執筆意図の抉剔を軸に行う必要があろう。

なお、董其昌の書論においては、生熟説と並んで「淡」語も注目されており、彼が理想とした境地であると説明される。[27]この語は数件の記述に確認できるものの、有紀年記述には殆ど見られない。稿を改めて言及することも困難であるため、ここにある用例を挙げ、先述のように鑑蔵に注目して考究する必要性を示してみたい。[28]

「淡」用例の一つに、以下の七八歳六月時の記述が挙げられる。

書須参「離」・「合」二字、楊凝式非不能為欧・虞諸家之体、正為離、以取勢耳。米海岳一生夸詡、独取王半山（安石）之枯淡、似不能進一歩、所謂「雲花満眼、

終難脱去浄尽」[29]。

「離」語によって楊凝式を称賛する。ここでの「淡」はあくまで、さっぱりした趣きといったものを示すのみであり、当該記述では特に称賛すべき要素として取り上げられていない。文脈によっては生熟説Aのように、重視すべき要素として用いられていたものと推測される。

注

(1)『画禅室随筆』成立については不明な点が多い。黄朋「関于《画禅室随筆》編者的考訂」(『東南文化』総第一四九期、二〇〇一)、黄朋「関於《画禅室随筆》篇者的考訂」(陳浩星主編『南宗北斗—董其昌書画学術研討会論文集』澳門芸術博物館、二〇〇八)参照。

(2) 薛永年「謝朝華而啓夕秀—董其昌的書法理論与実践」(上海書画出版社編『董其昌研究文集』同社、一九九八)は唯一、古法変革を謳う説が変化した点を指摘し、「離」「合」語による説(以降、「離合説」と称する)を後発のものと指摘している。また、藤原有仁訳注「画禅室随筆」解題(中田勇次郎編『中国書論大系』第一〇巻、二玄社、一九九二)は、有紀年記述の収集により董の理論形成の跡付けができる可能性について言及する。しかし、これらを承けた検討は見られない。

(3) 拙稿「董其昌「書の時代性」説成立の背景—唐人書に存する「法」の称揚に着目して—」(『書論』第四〇号、書論研究会、二〇一四)参照。なお、名品とされる書跡に董其昌が題跋を付す例は多いが、それらは恣意的に賛辞を記したと考えられるため除外している。題跋の性格については、鈴木洋保「書と題跋」(杉村邦彦編『中国書法史を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇二)参照。

(4) 拙稿「董其昌における顔真卿書法評価の変転とその契機」(『国語国文論集』第四四号、安田女子大学日本文学会、二〇一四)。

(5) 拙稿「董其昌書論における離合説について」(『芸術学研究』第一四号、筑波大学大学院人間総合科学研究科、二〇一〇)参照。

(6) 中川憲一氏による指摘がある。福本雅一ほか訳『新訳画禅室随筆』(日貿出版社、一九八四)参照。本説は、後掲董説Dを承けて発せられた可能性が考えられる。

(7) 主要なものには、藤原有仁「董其昌の書と書論」(古原宏伸編『董其昌の書画』研究編、二玄社、一九八一)、王崗「董其昌書法美学論」(『書法研究』総第三六輯、上海書画出版社、一九八九)、喩仲文「論董其昌〝士気説〟的美学特徴」(『武漢大学学報』人文科学版、第二二巻第四期、二〇〇三)、樊波『中国書画美学史綱』修訂版(吉林美術出版社、二〇〇六)、呉鵬「董其昌〝字須熟後生〟理論重新審視」(『南京芸術学院学報』美術与設計版、二〇〇八年第四期)がある。特に呉氏論考は、明末以前の様々な文献への配慮が特筆される。

(8) なお、孫過庭「書譜」を参照したことによるのか、前掲喩仲文氏は、「稚拙な生→巧みな熟（ただし、主体的人格の修養がなければ職人となる）→彫琢の痕跡のない生」の三段階を見通す。ほかにも、前掲王崗氏、樊波氏は各々その解釈に至る検討が異なるものの、喩氏と同様、「生→熟→生」の三段階を想定する。

(9) 各時代の書について並列して挙げ、近似した短い語句にて評した言。後掲味水款記第五則参照。なお、歴代の書論における同説については、中田勇次郎「書の時代性」（中田氏『中国書論集』二玄社、一九七〇）、及び拙稿「書の時代性説の諸相」（『中国文化』第六九号、二〇一一）参照。

(10) 拙稿「湯煥『書指』に見られる生熟説と「法」語の使用」（石田肇教授退休記念事業会『金壺集―石田肇教授退休記念金石書学論叢―』同会、二〇一三）。

(11) 同上拙稿の現代語訳参照。

(12) 『嘉業堂叢書』本（劉承幹編『嘉業堂善本書影』珍稀古籍書影叢刊四、北京図書館出版社、二〇〇三）を底本とし、屠友祥校注『味水軒日記』（宋明清小品文集輯注二、上海遠東出版社、一九九六）を参照しつつ標点を施した。なお、底本は最初の引用箇所にて示し、以降は特に記さない。

(13) 運筆の勢いのみではなく、字勢をも指すと見られる。フランソワ・ジュリアン、中島隆博訳『勢 効力の歴史―中国文化横断』（知泉書館、二〇〇八）も参照。

(14) 前掲注3拙稿参照。

(15) 『容台別集』巻四・題跋「雑記」。筑波大学附属図書館蔵の再刻本（一六三五刊）による

(16) 『文淵閣四庫全書』第一〇三七冊（台湾商務印書館、一九八三―八六）による。

(17) 『容台別集』巻四・題跋「書品」。

(18) 『容台別集』巻四・題跋「書品」。

(19) 『画禅室随筆』巻二「画旨」。汪汝禄引（一六七六）刊本の和刻本による。前掲注6中川氏は、その訳で「生」「熟」を「未熟」「熟練」と訳す。また、董の『画眼』『画旨』所載記述と異同があることが指摘され、「画須熟外熟」とする。

(20) 前掲注4拙稿参照。

(21) 前掲注5拙稿参照。

(22) 国立故宮博物院編輯委員会『董其昌法書特展研究図録』（国立故宮博物院、一九九三）による。訳は、拙稿「台北・故宮博物院蔵董其昌「論書冊」について」（『書芸術研究』第三号、筑波大学人間総合科学研究科書研究室、二〇一〇）参照。

(23) 前掲注3拙稿、注5拙稿参照。

(24) 首都博物館蔵「金沙帖」。同大系編委会・北京市文物局編『北京文物精粋大系』書法巻（北京出版社、二〇〇三）による。

(25) 「壬寅（一六〇二、四八歳時）四月、余訪于比部中甫（玉立）於金沙。中甫出諸古帖相質、有唐人「月儀帖」。生平僅見、因手臨之、欲刻入『鴻堂帖』。帖成遂遺此書。雖余所臨倣、実与真帖頗肖似。第不知唐名賢為誰。殆元和以後手也」（台北・故宮博物院蔵「臨月儀帖」款記。国立故宮博物院編纂委

員会編『故宮書画録』増訂本一、国立故宮博物院、一九六五による。また、董其昌はうねる筆線を有する書風を好んでおり、楊凝式の書風もこれに該当したと考えられる。拙稿「歴代書跡に対する董其昌の鑑定・評価基準―褚摹系「蘭亭序」に近似する一群の書跡の存在から」（『書学書道史研究』第二三号、書学書道史学会、二〇一三）参照。

(26) 以下の陶岳『五代史補』巻一のように、概ね𤣥人を装ったなどという記述が窺えるのみである。

楊凝式父渉、為唐宰相。太祖之篡唐祚也、渉当送伝国璽。時凝式方冠、諫曰、「（中略）乃更手持天子印綬以付他人、保富貴、其如千載之後云云何。其宜辞免之」。時太祖恐唐室大臣不利於己、往往陰使人来探訪群議、搢紳之士、及禍甚衆。渉常不自保、忽聞凝式言、大駭曰、「汝滅吾族」。於是神色沮喪者数日。凝式恐事泄、即日遂佯𤣥、時人謂之「楊風子」也（『文淵閣四庫全書』第四〇七冊（台湾商務印書館、一九八三―八六）による。）。

(27) 主要なものとして、劉詩『中国古代書法理論管窺』（江蘇教育出版社、二〇〇三）「董其昌的《画禅室随筆》」項、鄒建林「董其昌〝淡〟字別解」（『外語芸術教育研究』総第一五期、二〇〇六）が挙げられる。

(28) 前掲注4拙稿参照。

(29) 『澄蘭室古緑萃録』巻五「董香光節臨黄庭経各種巻」第五段款記。《続修四庫全書》編纂委員会編『続修四庫全書』第一〇八八冊（上海古籍出版社、一九九五）による。

付　記

本稿は、ＪＳＰＳ科研費二四三二〇〇六六（代表者・菅野智明）の助成による成果の一部である。

（安田女子大学）